龍谷大学仏教文化研究所創設五十周年記念講演（二）

# 中世知識人の文学

## ――『海道記』の一端――

三角洋一（東京大学大学院総合文化研究科教授）

**司会・講師紹介**（大取一馬　龍谷大学仏教文化研究所研究調査部主任・文学部教授）

お二人目のご講演を始めさせていただきます。私は本学日本語日本文学科教員の大取と申します。ご講師の先生の紹介をさせていただきます。三角洋一先生は東京大学大学院を昭和四十八年に終えられまして、高知大学、白百合女子大学にお勤めになり、現在は東京大学大学院総合文化研究科教授として活躍されています。ご研究分野は日本古典文学全般で、物語文学、日記文学、説話文学、仏教文学、和漢比較文学と非常に幅広く、ご著書は平成六年に岩波書店から出版された『新日本古典文学大系』の『とはずがたり』をご担当されまして、平成八年には『物語の変貌』『源氏物語と天台浄土教』を若草書房から出版されています。平成十二年には『王朝物語の展開』、今年は、『宇治十帖と仏教』を若草書房から出版されています。その他多くのご著書、共著を出されていますが、その中で、文学と仏教との影響関係についていろんな角度から提言なさっておられます。このたびの講演会には最適の先生であります。それでは「中世知識人の文学―『海道記』の一端―」をテーマにご講演を賜ります。よろしくお願いいたします。

ただいまご紹介いただきました三角と申します。はじめにお断りと弁解をさせていただきますと、今回のテーマは「仏教の未来」ということでしたが、なるべく中身をわかっていただきたくて、このようなタイトルをつけてしまいましたことをお詫び申しあげます。「仏教の過去――

仏教の未来のために」という趣旨でお話するつもりで準備いたしましたので、どうぞよろしくお願いいたします。

『海道記』という作品ですが、中世の日記紀行文学を代表するものの一つで、中世に成立した和漢混淆文で書かれた優れた作品です。作品解説と旅の日程と地図をお出ししましたが、小学館の新編日本古典文学全集のシリーズの『中世日記紀行集』で、長崎健先生が担当された『海道記』からコピーしたものです。解説を拾い読みしますと、作者は知られておりませんが、年齢は五〇歳あまりで、八〇歳の老母がおり、京郊外の白川に住んでいること、五〇歳になってから出家、仏教に帰依する心が深いこと、承久の乱によって誅せられた貴紳と縁故があったらしいこととという作者像が浮かんでまいりますが、その作者の知的基盤についてこれからお話をさせていただきます。

長崎先生の解説にもありますように、『海道記』は第一部、第二部、第三部の三部構成となっていまして、私なりに大段落をもうけて内容をメモさせていただきました。時間に余裕があれば、第一部の長い「序文」や第三部の「西路の帰願」についてもご説明いたしたい気持ちはあるのですが、省略させていただきます。あとでお目通しください。これから取り上げますのは、第二部の京から鎌倉への「鎌倉紀行」のごく一部です。ここで引用しますテキストは、今度は岩波書店の新日本古典文学大系の『中世日記紀行集』で、『海道記』は大曽根章介先生と久保田淳先生のご担当です。漢字・カタカナ文でして、読みやすいように送り仮名を多くしてあります。

用意しましたプリントには、「『海道記』の農村描写」「『海道記』の動物描写」とありますが、このようなところに注目するという視点は、早く昭和一桁の時点で玉井幸助先生の岩波文庫『東関紀行・海道記』にあらわれていました。

かういふ作者であるから、旅行の途中、到るところで農民・漁夫・商賈(こ)――地方と都を往復する商人のことです――、さては宿屋・遊女屋などの世渡りのさまに対して涙ぐましい同情の心を寄せてゐる。

また、戦後の朝日新聞社の日本古典全書『十六夜日記・海道記』の解説では、

作者は人生を肯定してゐる。だから荒田を打つ農夫や、養蚕にいそしむ婦女や、泥田に働く村童の姿に同情の目を注いでゐるが、同時に、かうした人間の営みが哀れにも見える。鳴海の浦で人馬の足に驚いて走り騒ぐ小蟹どもが執着のために命を失ふのを見ても、人間の迷ひが反省せられる。津島の渡りで浮葉の上にうづくまる蛙が、浪をかけられて平気でゐるのに興じたのは、単なる軽い感興ではない。人の世の荒浪を認め、浪にゆらるる人間の煩悩を認め……

というふうに、すでに印象批評風に語っておいでした。私が若い頃、『海道記』を読んだ読後感も玉井先生とまったく同じ印象でした。その時に考えましたのは、このまま印象批評で終わらせてはいけない、いつかしっかり仏教について勉強してから、漢籍についても学んでから、あらためて『海道記』を読みなおしてみようという遠大な計画でして、ようやく三〇年後にささやかな論文を書き上げ、本日、こうして『海道記』の作者の人柄とか、その知的基盤についてお話させていただくことができるようになりました。ずいぶん時間がかかって、私の歩みののろさがつくづく情けないと恥じ入っている次第です。

「『海道記』の農村描写」のプリントをご覧ください。下段に「地子沙汰」「勧農沙汰」「二月・田の神祭」「荒田打ち」「若菜摘み」「四月・神祭」「分水（灌漑）」「田植え」とメモいたしましたが、これは日本中世史の研究者戸田芳実さんとおっしゃる方が、すでに一九七六年の時点で『海道記』に注目して、「一三世紀の農業労働と村落」という論文をお書きになっています。中世にはこのような村落共同体ができあがっていて、農事暦にしたがった祭りや農作業が行われていたことを指摘した歴史学の大変優れた業績です。私の方はもっぱら本文を読み進め、出典を指摘しながら解説をしてまいりますので、ちょっと退屈かもしれませんが、馴れるまでしばらく我慢してください。

『海道記』の作者は貞応二年（一二二三年）四月に京から鎌倉に出発しました。

四月四日、暁、京ヲ出ヅ。朝ヨリ雨ニ逢ヒテ、勢多橋ノ此方ニ暫ク留マリテ浅増クシテ行ク。今日明日トモシラヌ老人ヲ独リ思ヒヲキテユケバ、

思ヒヲク人ニアフミノ契リアラバ今帰リコン勢多ノナカミチ

これが旅立ちのところです。

橋ノ渡リヨリ雨マサリテ、野径ノ道芝露コトニ深シ。八町嶮ヲ過グレバ、行人互ニ身ヲソバメ、一邑ノ里ヲ融レバ、奇犬頻リニ形ヲ吠ユ。今日シモ習ハヌ旅ノ空ニ雨サヘイタク降リテ、イツシカ心ノ中モ鶴夜ル様ニ覚エテ、

旅衣マダキモナレヌ袖ノ上ニヌルベキ物ト雨ハ降リキヌ

五〇歳で出家して、たまたま縁あって鎌倉に下る作者は、老母を残して、初めて長旅に出るのに、あいにく雨に降られて苦しい思いをした、という書き出しになっております。

田中打チ過ギテ民宅打チ過ギ遙々トユケバ、農夫双ビ立チテ畠ヲウツ声、行雁ノ鳴キ渡ルガ如シ。〔田ヲ打ツ時ハ双ビ立チテ、同ジク鍬ヲアゲテ歌ヲウタヒテウツナリ。〕卑女ウチムレテ前田ニヱグツム、存外ヌシヅクニ袖ヲヌラス。ソトモノ小川ニハ、河傍楊ニ風立チテ驚ノ蓑毛ウチナビキ、竹ノ編戸ノ墻根ニハ、卯ノ花サキスサミテ山郭公忍ビナク。

近江の国の草津、守山あたりの農村風景ですが、農民たちは共同で力をあわせて、田んぼを一つ一つ代わりばんこに耕しています。皆で集まって、歌をうたって一斉に鍬を振り上げ、振り下ろして耕すのですね。女性たちは用水路の小川で「ヱグ」を摘んでいるようです。作者はしっかり農事に目をとめていることに気づきます。このことについては、またあとで考えましょう。

このほかにも、あと二つほど興味深いことがあります。その一つは、作者は吠える犬、群れをなして飛び渡る雁の声、竹の垣根といった中国の漢詩文の世界に見られる題材を心得ているだけでなく、『源氏物語』もよく読みこなしていて、『源氏物語』を経由したかたちでここに利用、引用して豊かな表現を生み出しているのではないかということです。今読んでまいりました中に、「奇犬頻リニ形ヲ吠ユ」とありましたが、『源氏物語』の浮舟巻にも、匂宮が浮舟に会いに行こうとして近くの村里の物陰に隠れていようとしたところ、「里びたる声したる犬どもの出で来てののしるも、いと恐ろしく」とあります。人家で飼われている犬が見知らぬ旅人に吠えかかるという描写は、屈原の「離騒」や陶淵明の「桃花源記」に見えます。雁が竿になり、鉤になり、列をなして鳴いて飛んで行くさまはしばしば漢詩に詠まれますが、作者は農夫の荒田打ちの光景をこれに見立てていました。これも『源氏物語』の須磨巻に、「雁のつらねて鳴く声、楫の音にまがへるを」とあります。「竹ノ編戸ノ墻根」も同じ須磨巻に、「竹編める垣しわたして、石の階、松の柱、おろそかなるものから」と光源氏の侘び住まいの描写に見えますが、これは白楽天の詩のことばを用いたものでした。このようなところに、作者の教養があらわれていたのです。

もう一つ興味深いことは、このあたりでは晩春から陰暦四月の初夏にかけての季節感をことさら強調するように、作者の和歌の素養が大いに披瀝されているということです。和歌文学がご専門の久保田先生がていねいに拾い出してくださいましたが、「ヱグ」のところは『後撰集』の「君がため山田の沢にゑぐ摘むと濡れにし袖は今も乾かず」、「河傍楊」は出典としては『俊頼髄脳』の方がよいと思いますが、「稲蔣川副楊水行けば靡き起き立ちその根は失せず」、「驚の蓑毛」は『秋篠月清集』の「遠方や岸の柳にゐる驚の蓑毛波よる川風ぞ吹く」、卯の花にほととぎすは『新古今集』の「鳴く声をえやは忍ばぬほととぎす初卯の花の蔭に隠れて」にもとづく描写なのでした。ここまで仕組まれているのを見る

と、はたして作者はほんとうにこのような光景をながめたのか疑わしくなってくるのですが、まあ作者の詩心の発露と考えておきましょう。

次は、関、亀山のあたりでしょうか。鈴鹿の関のほとりで一泊して、翌朝の旅路の風景です。

カクテ邑里ニ出デテ田中ノ畔ヲ通レバ、左ニ見右ニ見ル、立田眇々タリ。或ハ耕シ、或ハ耕サズ、水苗処々。而ノミナラズ、池溝カタ〴〵ニ決リテ、水ヲオノガヒキ〴〵ニ論ジ、畦畝アゼヲ並ベテ、苗ヲ我ガトリ〴〵に芸ヌタリ。民烟ノ煙ハ、父君心体ノ恩火ヨリニギハヒ、王道ノ徳ハ、子民稼穡ノ土器ヨリ開ケタリ。水竜ハ本ヨリ稲穀ヲ護リテ、夏ノ雨ヲクダシ、電光ハ兼ネテヨリ九穂ヲ孕ミテ、三秋ヲ待ツ。東作ノ業力ヲ励マス、西収ノ税タノモシクミユ。劉寛ガ刑ヲワスレタリ、蒲鞭定メテ蚩ト成リヌラン。

苗代ノ水ニウツリテ見ユルカナ稲葉ノ雲ノ秋ノ面カゲ

漢文訓読文になっていて、漢語の多い、大変難しい文章で、現代の私たちには簡単には読みこなせないのですが、大意はこういうことでしょうか。このあたりまで来ると、もう耕し終わっているところもあって、用水路の水を田んぼに引き入れたり、田植えの済んだ水田もある、そんな風景が広がっているというのです。そこで作者はどう思ったかというと、王と民の関係は一家の父と子の関係に等しいのだから、父のような為政者の善政によって、子にあたる国民の生活は豊かになり、活気にあふれて農作業にいそしんでいるようだ、とまず観察します。これから先、雨が十分に降り、雷が鳴ってたっぷり稲妻が光ると、秋にはさぞ豊作で、税収も大いに潤うだろうと、もう夏から秋のにぎわいを思いやります。きわめて儒教的なものの見方、農本主義的な考え方があらわれているといってよいでしょう。

このような思想はどこからきているのかということですが、本格的な意味では三史五経などと呼ばれる儒教の経典に由来するのですが、じつは幼学書と呼ばれる少年向けの教科書の段階から身につけさせられていたもののようです。『千字文』がその一例です。千の異なる文字を用いて、四文字で一句、二句が対句のかたちで、偶数句ごとに韻を踏んでいて、全部で二五〇句からなり、名文句や中国故事を満載しています。その第一六三句から第一六八句はこんなぐあいです。「治本於農、努茲稼穡、俶載南畝、我藝黍稷、税熟貢新、勧賞黜陟」とあって、「本を農に治めて、この稼穡に努む。俶めて南畝に載とし、我黍稷を藝るたり。熟を税ぎ新を貢ぐ、勧賞し黜陟す」とでも読むのでしょうか。『海道記』にはここにあるように荒田打ちと分水や田植えが描かれていて、作者は早くも、平和な世の中なので雨と稲妻の恵みにより秋の豊かな収穫が思いやられると予祝しているのでした。

その次は、尾張の国海部郡の農家の風景です。こちらには、父親は田んぼに行っていて不在で、老人と母親と幼い子どもが見えます。

渡リハツレバ尾張ノ国ニ移リヌ。片岡ニハ朝陽ノ景ウチニサシテ、焼野ノ草ニ鶺鳴キアガリ、小篠ガ原ニ駒アレテ、泥ミシ気色引キカヘテミユ。見レバ又園ノ中ニ桑アリ、桑ノ下ニ宅アリ、宅ニハ蓬頭ナル女、蚕簀ニ向カヒテ蚕養ヲイトナミ、園ニハ潦倒タル翁、鋤ヲ柱イテ農業ヲツトム。大方禿ナル小童部トイヘドモ、手ヲ習フ心ナク、タヾ足ヲヒヂリコニスル思ヒノミアリ。弱クシテヨリ業ヲナラフ有様、哀レニコソ覚ユレ。実ニ父兄ノ教ヘツヽシマザレドモ、至孝ノ志自カラアヒナル者歟。

山田ウツ卯月ニナレバ夏引キノイトケナキ子モ足ヒヂニケリ

農家の庭先と、家で蚕を飼っている風景があらわされています。ちょっと、先ほどの『千字文』の第一六三〜一六四句に付けられた注を見てみましょう。唐の李暹という人による注です。訓読しますと、「男ハ耕耘ヲ努メ、女ハ紡績ヲ努ム。衣食既ニ足レバ、即チ栄辱ヲ知ル。ユヱニ天子ハミヅカラ耕耘籍田シ、皇后ハミヅカラ養蚕ス」とあります。現代においても、天皇陛下が田植えをされたという皇室の神事にかかわるニュースを拝見しますが、男は穀物を栽培し女は蚕を飼う、天子と皇后は率先垂範お手本を示すという古代中国の農本主義の考え方が脈々と今に伝えられているのですね。その裏づけとなっている『礼記』月令の記事を読むことは省略いたします。

ここには、もう一つ重要な典拠があります。『古文孝経』庶人章第六ならびに孔伝といいますが、その孔安国注がそれです。『論語』と『孝経』は儒教の基礎的で最も重要な経典でした。『古文孝経』の本文は、「子曰ハク、天ノ時ニ因リ、地ノ利ニ就キ、身ヲ謹シミ、用ヲ節シ、以ツテ父母ヲ養フ。此レ庶人ノ孝ナリト」とありまして、孔伝では、「天ノ時ニ因リ、地ノ利ニ就キ」のところの説明をしたあと、「庶人ノ業ハ稼穡ヲ努メトス」と述べて農作業のさまを具体的に描き出し、最後に、「髪ヲ露ハニシ足ヲヒヂリコニシテ、小ヨリシテコレヲ習ヒ、ソノ心ヲ恁ンズ。コレソノ父兄ノ教ヘツヽシマザレドモ成リ、ソノ師弟ノ学ブトコロ労セズシテ能クスルナリ」と親孝行にひきつけて結んでいます。最後のところはなるべく『海道記』のことばを用いて訓読してみましたが、つまり作者は、貴族の子弟なら漢字を覚え書道を習うべきところ、農家の子どもは「手ヲ習フ心ナク、タヾ足ヲヒヂリコニスル思ヒノミア」るとユーモラスに描きながらも、早くも家業を継ごうと土に親しんでいるのは親孝行な心がけで感心だと、孔安国の注釈を受けとめたうえで褒めちぎっているのですね。

『礼記』曲礼上にも、「ソレ人ノ子タル者、出ヅルニハ必ズ告ゲ、反レバ必ズ面ハス。遊ブトコロ必ズ常有リ、習フトコロ必ズ業有リ」と

あります。子どもは外出する時には「これから、どこそこに行きます。行ってもいいですか」と親に断り、帰ってきたら、「元気で戻りました」と親のところに顔をみせる。遊びに出かける行き先はいつも決まったところで、学ぶことといえば家業、親の仕事というわけです。この子どもはほんとうは泥んこ遊びをしているだけだったのかもしれませんが、作者は、幼い今から親の跡を継いで農業に精を出そうということで、親が教えないのに見よう見まねで土に親しんでいると見立てているのです。

作者の農民に注ぐ目はどうしてこのように優しく、その優しさはどこからきているのでしょうか。こんなふうに考えてみてはどうでしょうか。この時代は一方で京に朝廷があり、また鎌倉に幕府があって、朝廷の政治は鎌倉幕府の武力に支えられて成り立っていました。作者は為政者の立場から、今の平和な世を言祝ぐとともに、農民の重労働に対してもあたたかい目で見守っていました。おそらく、中央の貴族の家のまつりごと、家政にたずさわりつつも、農民とか庶民とも直接接触する機会のある中級クラスの知識人であったからこそ、こういう視点をもちえたのではないかと思った次第です。

続きまして、話題を『海道記』の動物描写のほうに進めたいと思います。作者は動物に対しても優しい眼差しを注いでいるようでして、一体これはどういうことなのかを考えてまいります。旅に出て四日目、四月七日の条をまず取り上げます。

七日、市腋ヲ立チテ津嶋ノ渡リト云フ処舟ニテ下レバ、蘆ノ若葉青ミワタリテ、ツナガヌ駒モ立チハナレズ、菱ノ浮葉ニ浪ハカクレドモ、難面キ蛙ハサワグケモナシ。取リコス棹ノシヅク袖ニ懸カリタレバ、

指シテ物ヲ思フトナシニミナレザヲミナレヌ波ニ袖ハヌラシツ

渡リハツレバ尾張ノ国ニ移リヌ。片岡ニハ朝陽ノ景ウチニサシテ、焼野ノ草ニ鶺鳴キアガリ、小篠ガ原ニ駒アレテ、泥ミシ気色引キカヘテミユ。

ここは玉井先生が、「浮葉に水がかかっても平気な蛙」と述べていらっしゃったところです。初夏の季節感がよくあらわれていてまして、今まで屋内に飼っていた馬が、ようやく草も生えてきたので放し飼いにされたのですね。また、棹の滴がかかるのに、菱の葉にいる蛙は平気な顔をしている。片岡には朝日がさしてヒバリが鳴いて高く飛び上がります。先ほどの農村描写においても、「奇犬」や「鶴」――「鶴夜ル」という表記に出てきました――、「行雁」「鷺」「山郭公」が登場しました。作者はよっぽど動物好きだったのでしょうか、異常なほど動物にこだわ

っていると思うのです。

とはいえ、じつはこのようにリアルに感じられる初夏の光景も、とっくに和歌の世界では描き出されていました。『詞花集』春・俊恵法師「まこも草つのぐみわたる沢辺には繋がぬ駒も離れざりけり」と『千載集』夏・源俊頼「あさりせし水の水鏑にとぢられて菱の浮葉にかはづ鳴くなり」ともう一つ、『後拾遺集』春上・藤原長能「狩りに来ば行きても見まし片岡の朝の原に雉子鳴くなり」です。おまけに、これらの有名な和歌の中ですでに、「まこも草」と「繋がぬ駒」、「菱の浮葉」と「かはづ」、「片岡の朝の原」と「雉子」のような巧みな取り合わせが示されていたわけで、『海道記』の作者は和歌にたしなみが深かったので、名歌を応用して季節描写を果たしていたということが知られるわけです。

次は、四月八日の鳴海潟の条に移ります。ここには小蟹が出てまいります。

猶コノ干潟ヲ行ケバ、小蟹ドモオノガ穴々ヨリ出デテ蠢キ遊ブ。人馬ノ足ニ周章テテ、横サマニ跳リ平ラカニ走リテ、己ガ穴々ヘ逃ゲ入ルヲ見レバ、足ノ下ニフマレテ死ヌベキハ、外ナル穴ヘ走リ行キテ命ヲ生キ、外ニオソレナキハ、足ノ下ナル穴ヘ走リ来テ踏マレテ死ヌ。憐ムベシ、煩悩ハ家ノ犬ノミナラズ、愛着ハ浜ノ蟹モ深キ事ヲ。是ヲ見テハカナク思フ我等ハ、賢シヤ否ヤ。生死ノ家ニ着スル心ハ、蟹ニモマサリテハカナキ者歟。

誰モイカニミルメアハレニヨル波ノ溺フ浦ニマヨヒキニケリ

東海道は気候が温暖で、比較的平坦な海沿いの道路でしたが、多くの川が東に流れて太平洋に注ぐ河口の付近を横断する道筋になっていましたので、川にぶつかるたびに、実は不便なことに道が途切れるのです。そして、熱田のあたり、鳴海潟もれっきとした東海道の道筋で、ここは引き潮で干潟の時は浜辺の道が通じているのですが、満ち潮になると道が遮断されて通じなくなります。困ったことですね。潮の満ち引きといっても、イメージの湧かない方もいるかもしれません。有名なのは、厳島神社の大鳥居でしょうか、海に浮かぶ大鳥居のながめは絶景ですが、引き潮の時には大鳥居まで歩いて行けます。

さて、引き潮で干潟になっている頃合いには、小蟹たちが穴からポコッと顔を出して歩き回っていると、そこに東海道を旅する人々、馬に乗る人、歩いて旅する人が干潟を渡ろうとするのです。小蟹は慌てふためいて、横っ跳びに逃げたり這うように逃げたり、わざわざ逃げまどって、逃げたために人や馬の足に踏みつぶされてしまうものもいれば、逃げたお陰で助かるものもいる。生きよう生きようとして右往左往し、衝動的

にただただ逃げまどうのでしょうが、あるものは助かり、あるものは踏みつぶされて死んでしまう。

作者は、なんておろかな蟹なんだろう、生への執着が深く、煩悩に振り回されているから、生死の境に身を置いた時におろおろして、助かる命を失うことになるのだと、蟹をあわれんでおります。しかし、それだけではありません。蟹を見て感じたことを、改めてわが身に引きつけて考えなおし、ではそういう自分はどうなのか、「蟹をあわれに思う私は、賢いといえるのかどうか。仏教の教えを知りながら、この世に執着するとは、蟹よりも情けないとはいえないか」と問いかけないではいられないのです。

「煩悩ハ家ノ犬」は『往生要集』大文五に載るたとえで、『宝物集』巻四には嚙みくだいて「煩悩は家の犬、打てども去ることなく」とあります。煩悩は愛犬、番犬のようなもので、いくら追い払っても振り捨てることは難しいということです。「生死ノ家ニ着スル心」は、この世は煩悩や苦に満ちているのに、とかくこの世に執着する心をいいます。このように、作者は仏教的なものの見方をしっかり身につけた人で、だからこそ生き物をあわれむ優しい心の持ち主であったことも知られるわけです。

次は、四月十三日の条を取り上げてみます。江尻の浦は今の静岡市清水区です。二つに区切って、まず前半部分を読んでまいりましょう。

江尻ノ浦ヲ過グレバ、青苔石ニ生ヒ、黒布磯ニヨル。南ハ澳ノ海淼々ト波ヲワカデ、孤帆天ニトビ、北ハ茂松鬱々ト枝ヲ垂レテ、一道ツラヌナス。

漁父ガ網ヲ引ク、身ヲ助ケントシテ身ヲ労レシメ、游魚ノ釣ヲノム、命ヲ惜シミテ命ヲ滅ス。人幾バクノ利ヲカ得タル、魚幾バクノ餌ヲカ求ムルヤ。世ヲ渡ル思ヒ、命ヲタバフ志、彼モ此モ共ニ同ジ。

はじめに、技巧的な漢文訓読文の調子で風景描写がありまして、次には、漁夫と魚についての作者独特の考察が述べられます。漁師は生活のために漁をする。漁師の仕事はきつい労働で、これでは生きていくためとはいえ、かえって命をすり減らしているのではないか。魚は餌をとろうとして釣り針にかかり、人間にとらえられてしまう。つまり、生き延びようとして、命を縮めている点では、漁夫の生業も魚の生態も同じではないかというのです。作者は、人間とか動物とかの差別もなく、生きとし生けるものたちを等し並みにながめる視点が備わっているのですね。ちょっと余計な感想を申しますと、おろかな魚に対してはやや上から目線で、いやに優しい物言いをして、漁夫に対しては失礼な発言をしているように感じられるのですが、いかがでしょうか。

続けて、後半部分を読みます。

是ノミカハ、山ニアセカク樵夫ハ、北風ヲ負ヒテ晩ニ帰ル、野ニアシナヘグ商客ハ、白露ヲ払ヒテ暁ニ出ヅ。面々ノ業ハマチマチナリト云ヘドモ、各々ノ苦シミハ是皆渡世ノ一事也。

人ゴトニ趁ル心ハカハレドモ世ヲスグル道ハヒトツナリケリ

此ノ浦ヲ遙カニ見亘シテ行ケバ、海松ハ浪ノ上ニ根ヲ離レタル草、海月ハ潮ノ上ニ水ニ移ル影、トモニコレ浮生ヲ論ジテ人ヲイマシメタリ。

波ノ上ニタヾヨフ海ノ月モ又ウカレ行クトゾ我ヲミルラン

何も漁夫だけが重労働をしているのではない、山で生活している木こりも、日本国中歩き回る商人も皆、苦しい思いをして生活のために働いている。もっといえば、貴族も武家も一緒で、生きていくということは日々の仕事に追われて過ごすうちに、命をすっかりすり減らしてしまうもののようだという、慨嘆の調子がはっきりうかがえます。同じように、海に漂うクラゲを見ても、クラゲのほうでも私のことを、頼りない人生を送った末に浮かれ漂ってここを通り過ぎる者がいると思っているに違いないと、こんなふうに思索の糸を紡いでいくのです。クラゲの心を思いやるなんて、なるほど和歌においては動植物を人に見立てる擬人法があって、もちろんその影響も大きいと思います。しかしやはり、作者の思考の根底には仏教的なものの見方があり、観察や想念を最後は自分に結びつけて考えないではいられない、そのような作者のイメージが浮かびます。

ちょっと跳びまして、同じ十三日の清見潟の条も見てみましょう。

語ラバヤ今日ミルバカリ清見潟オボエシ袖ニカヽル涙ハ

海老ハ波ヲ游ギ、愚老ハ汀ニ溺フ、共ニ老イテ腰カヾマル。汝ハ知哉生涯浮カメル命今イク程ト、我ハ不知幻ノ中ノ一瞬ノ身。

風光明媚な清見潟を称えたあと、海老に目をとめて、呼びかけています。海面の上からほんとうに海底の海老を見つけたのですかね。作者が勝手に海老を見たことにして、創作して書いているような気が半分位してならないのですが。私も腰が曲がる年齢になってしまった、水の中で長生きしてきた海老よ、お前は余命いくばくか分かっているのか、私は幻の中の一瞬のような人生を送る身で、いつ死ぬかも知らないのだが、

と語りかけています。

ここまで、まず作者は儒教の教養をしっかり身につけた人で、為政者の立場に立って、しかし農民に対しても優しい目をもっている人物だと説明いたしました。また、動物に対しても優しい心をもっていて、動物と人間との間に何の違いがあるのか、煩悩に振り回され六道輪廻を繰り返すような生き方をする点では同じだと、動物を見るたびに自分を反省しているところを見てきました。

さて、第一部の「序文」によると、作者は五〇歳になってから出家し、まもなく鎌倉に下る旅に出ました。私にできる仏道修行は坐禅と頭陀の行ぐらいなので、この旅を新発意の頭陀行にしようと自分に言い聞かせていました。第三部の「西路の帰願」では鎌倉から帰京する旅について、今度は東国から西に向かう歩みということで、往生極楽のための初歩の修行の旅と位置づけて、以下、だいたい天台浄土教の立場にもとづいて、わが往生極楽の願いを開陳します。

このように、『海道記』の作者は儒家であり、仏者でもあったのでしたが、次にはまず、儒教の方では人間をどう見ているか、動物をどう見ているのかを考えてみる必要があります。儒教では、歳老いた親には一日に一度は肉料理を差し上げるとか、先祖をお祀りするにも酒や肉をお供えするとか、さまざまな儀式で生贄を用います。そこには、人間と動物とでは決定的に違うのだという考えが根底にあったからのようです。『尚書』周書・泰誓上には、「惟レ天地ハ万物ノ父母、惟レ人ハ万物ノ霊ナリ」とあって、動物学で人類を指して「霊長類」と名づけられたのは、このことばによります。また、『礼記』曲礼上では、「鸚鵡ハ能ク言ヘドモ、飛鳥ヲ離レズ。猩猩ハ能ク言ヘドモ、禽獣ヲ離レズ。今人ニシテ礼無ケレバ、能ク言ヘドモ、亦タ禽獣ノ心ナラズヤ」といわれていて、オウムや猩々がことばを話すからといって所詮は鳥や獣に過ぎない、人間とは違うといいます。ただし、人間であっても礼を身につけていないのならば、禽獣と変わらないともいっているのですね。猩々は大酒飲みで真っ赤な顔をした動物です。

これに対して、仏教の方はどうなのでしょうか。生きとし生けるものの所属する六道のうち人間は人道、動物は畜生道で、確かに三善道の一つと三悪道の一つというように分かれていて、違うといえば違うのですが、だからといって人間と動物は別物だと峻別することはないのですね。今、私は人間だけれども、道徳にそむく行いを重ねたら、次には動物に生まれ変わるかもしれない。今、目の前にいる動物も、もしかして尊いお経を聞くか何か功徳を積んだら、次には人間に生まれるかもしれない。それだけではなく、今、目の前にいる動物はもしかすると、生まれ変

わり死に変わりしてきた過去の世界では私の親であったかもしれない、そう考えてあらゆる生き物をあわれみなさいというのです。六道を輪廻する生き物という点で人間と動物に区別はないし、生き物を粗末に扱ってはいけない、こういう放生の心が仏教の考え方なのでした。

儒教では人間と動物の間に限らず、夫婦・親子・長幼・主従などさまざまな人間関係にもかならず序列が考えられていて、上の者は下の者をあわれみ慈しむ、下は上を尊び敬うということがありますが、『海道記』の作者は明らかに仏教の立場に立って動物をあわれみ、煩悩の尽きないわが身を反省しているのでした。では、このように思い描かれる『海道記』の作者はよほど特殊な思想の持ち主だったのでしょうか。いいえ、『海道記』という作品が珍しい内省の文学になっているのであって、作者の思想が珍しいのではありません。

中国の魏晋南北朝時代の北斉の儒学者に顔之推（五三一～六〇二？）という人がいました。『顔氏家訓』という書物を子孫のために遺しました。儒教と仏教の二教一致の立場に立った学者で、帰心篇第十六において、生き物を粗末に扱って現報を受けた例などを挙げて、儒教に欠けている仏教のすぐれた点を主張しています。この顔之推の考え方を輸入して定着させたのが、奈良時代、聖武天皇のころの学者政治家吉備真備で（六九五～七七五）という大臣です。二度も中国に渡って学んできた人で、中国の制度や文物を取り入れて国際国家の仲間入りを果たした功績があります。『私教類聚』という、子孫のための日本版『顔氏家訓』を著しました。残念ながら、今は目次しか残っていないのですが、三十八ヶ条から成っていて、道教の神仙思想を信じてはいけないとか、儒教と仏教は根本のところで通じあっており、儒教と仏教の教えに親しみなさい、教えを守りなさいと説かれていたようです。

もう一人、忘れてはならない人がいました。唐の政治家で文人の白居易（号は楽天。七七二～八四六）です。日本文学史にたいへん大きな影響を与え続けた人で、科挙に合格した儒家の文人ながら、道教というより老荘思想にも親炙し、仏教信者でもありました。当時の中国知識人には珍しくないのですが、禅浄双修といって、禅宗を学び往生極楽を願ったのでした。日本ではどうしてこれほどまで好まれたかといいますと、儒・道・仏の三教一致の立場に立っていたこと、平明な詩文と高い見識、ほどよい精神論的な政治性の故でしょうか。平安時代にはもっぱら『白氏文集』が仰ぎ見られ、中世になると禅者とか願生者としても広く知られるようになりました。

振り返って日本人の精神的基盤のことを考えると、仏教が移入されたごく初期のころには、物部守屋が強く抵抗したことがありますが、やがて受け入れられてからは、政治社会や道徳は儒教に従う。世界観とか精神面のことは仏教をよりどころにする。古来祀ってきた土地の神、ご先

祖、国々の神も大切にする、後世のことばでいうと神道ですね。どうやら、道教は日本には定着しなかったようですが、老荘思想は儒教を補うものとして受け入れられました。そういうわけで、日本においては儒・仏の二教一致、ないし神道を含めて三教一致の立場から人々は行動し、思索を深めてきたということがいえそうに思います。

「中世知識人の文学」ということでお話させていただいた『海道記』の作者についても、作者の思想を取り出そうとするならば、もっと掘り下げて考えなければいけないのでしょうが、とりあえずは儒・仏二教に足場を置いていることを具体的に見てくるだけにとどまりました。ここではっきりしたことは、さまざまな生き物に目をとめては、あわれみや慈しみの心をもつ先達がいて、そこから思索を深め、わが身をかえりみて責めないではいられない、そういう文学作品を遺してくれたということです。生き物を大事にする仏教のものの見方も尊いことですし、仏教のものの見方に従って自己省察にふけるところも立派でした。私はこのような『海道記』の作者に向かい合うことができたとご報告することで、「仏教の過去――仏教の未来のために」と題するお話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

**司会**　三角先生、ありがとうございました。